

まとめと今後の課題

わたしたちは、平成2年度より、平成5年度までの4か年計画で「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」という研究主題のもと研究を進めてきたが、ここで、その前期に当たる2年間の実践を振り返ってみたい。

「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」の研究を進めるに当たり、わたしたちは、子供の実態把握、学習指導要領改訂の趣旨、学校の教育課程の全体構造や、領域・教科等の基本的な考えをまとめ、更に、「かかわり合い」という研究の視点から研究を進めていった。本研究は、教育課程という「指導内容」と、かかわり合いという「指導方法」の二つを併せ持つ研究であったため、指導内容と指導方法の関連性、研究の重点の置きどころなど研究の進め方の難しい面もあったが、指導内容と指導方法は切り離して考えられるものではなく、まして、教育課程の編成においてはその関連性は重要であり、前回の4年間の指導方法の研究からの発展という流れからしても自然かつ本質的な研究の取組ではなかっただろう。

かかわり合いの豊かな子供を育てるには、どのような教育課程を編成していかなければならないか。このことに関して、これまでの反省や学習指導要領の改訂の趣旨、研究の視点など多角的な検討を加えていった。その研究の中で、わたしたちは「それぞれの子供の自我の発達を促すことが、かかわり合いを豊かにしていくであろう。」という仮説を立て、自我に焦点を当て研究を進めてきたわけであるが、自我のとらえ方など難しい面も多く、本校なりの自我のとらえ方を明確にしていくことに多くの時間を要することとなった。しかしながら、人間としての発達の核となるものが「自我」であること、また、今回の学習指導要領の改訂の趣旨、換言すれば現在の教育に望まれているのが、人間の内面に根ざした教育の充実であることから、わたしたちが自我の発達を「自我関与」「自己の意識化」といった人間の内面に視点を当てより深く探っていったことは意義あるものであったと言えよう。更に、自我の発達は人間関係を前提として展開されるものであり、特に教師の子供へのかかわり方が自我の発達に大きな影響を及ぼすということから、教師自身のかかわり方を問い直し、子供とともに成長しようとする教師側の姿勢がより培われていったところにも、自我に焦点を当てて研究を進めてきた意義が見出すことができる。

わたしたちは、このように自我の発達を促すという立場から、教育課程編成の留意点を導き出し、教育課程の編成に当たってきたわけであるが、その留意点の一つである、「人とのかかわりが図れる場の設定」を受けて、異年齢集団での縦割り活動「なかまの時間」を新たに設け、全校児童生徒を8つのグループに分け試行的な実践を通して、集団の大きさや活動内容を探ったり、交流教育の充実を図ったりするなど、学校教育活動全体を通してかかわり合いの豊かな子供を目指し取り組んできた。

また、各学部においては、「かかわり合いの豊かな子供を育てる生活単元学習はどうあればよいか。」ということで、指導内容・指導方法の研究に取り組み、生活単元学習の指導計画作成、及び実践を通しての指導方法の研究を行った。生活単元学習の指導計画作成に当たっては、指導内容を子供の欲求、興味・関心と生活上の課題から導き出すとともに、研究の視点からこれまでの実践を振り返り、すべての単元の意義や価値を再検討していった。この指導計画作成において、研究の視

点である「自我の発達」といった子供の内面に目を向け、これまでの指導計画を見直し、指導内容や学習活動を探っていったことで、指導内容や学習活動がより個に応じる、個を生かすといった面からも充実されてきたと言えよう。しかしながら、まだ多くの課題が残されていることも事実であり、これからの実践を通して見直していく必要がある。

次に指導方法の研究についてであるが、各学部とも、前回の研究主題「かかわり合いの豊かな子供をめざして」において取り組んだ指導方法の研究をベースに、更に指導方法の充実を図っていった。このように、これまでの研究を生かしていくという取り組みが、よりよい成果を見出したと言えるが、本研究が、指導内容から指導方法までと、幅広い研究を行っていること、また、4年計画の前期ということで、基礎研究や教育課程の全体の枠組みの研究に時間をかけてきたということから、指導方法の研究を十分深められなかったことも反省として挙げられる。教育課程の全体構造や研究の視点等が明確にされたこれからは、指導方法の研究を更に深めていきたいと考える。

以上、2年間の研究のまとめと反省を述べてきたが、後期への今後の課題をまとめると次のようになる。

- 指導計画の作成及び実践を通しての修正。
 - ・ 領域・教科を合わせた指導以外（教科等）の指導計画の作成。
 - ・ 実践を通しての指導計画の修正。
 - ・ 小学部、中学部、高等部の12年一貫教育の立場からの系統性を見直し。
- 指導方法の研究の深化。
 - ・ 生活単元学習、及びそれ以外の指導の形態における指導方法の研究の推進。
 - ・ 各学部の指導方法に関する実践研究の充実。
- 「かかわり合いの豊かな子供」の評価の在り方。
- 人とのかかわりが図れる場の工夫、改善。
 - ・ 異年齢集団活動「なかまの時間」の集団構成や活動内容の検討。
 - ・ 交流教育の充実。
- 指導方法の研究から指導内容へのフィードバックの仕方。
- 「自我」に関する研究の推進。

ある朝の小学部でのスケッチ。T子が登校し玄関で靴を履き替えようとしている。そこへY君も登校し、「Tちゃんおはよう」と声をかける。そこへ6年生のR君が三輪車に乗ってTちゃんを迎えに来て、教室までT子を乗せていく。教室の中では、「M君お休み？」と尋ねるY君の声。朝の一こまを見てみても、様々なかかわりが展開されている。このようなかかわりを展開しているY君も、R君も、入学したころに比べずいぶん豊かにかかわれるようになってきているように思う。これからも、学校生活、家庭生活、社会生活において、一人一人の子供が豊かにかかわっていけるよう、研究を進めていきたいと考える。